

2019 年 7 月 21 日（日）「主の日を待つ管理者」

マタイ 24:45-51

45 主人から、その家のしもべたちを任されて、食事時には彼らに食事をきちんと与えるような忠実な賢いしもべとは、いったいだれでしょう。46 主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。47 まことに、あなたがたに告げます。その主人は彼に自分の全財産を任せるようになります。48 ところが、それが悪いしもべで、『主人はまだ帰るまい』と心の中で思い、49 その仲間を打ちたたき、酒飲みたちと飲んだり食べたりし始めていると、50 そのしもべの主人は、思いがけない日の思わぬ時間に帰って来ます。51 そして、彼をきびしく罰して、その報いを偽善者たちと同じにするに違いありません。しもべはそこで泣いて歯ざしりするのです。

【序論】

今日で 24 章を終えることになりますが、この章を通じて「世の終わりに起きる出来事」についての主イエスの教えを学んできました。そもそも、この教えが語られる発端となったのは、弟子たちの「**お話してください。いつ、そのようなこと（神殿の崩壊）が起こるのでしょうか。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか**」（24:3）という問いであった。それに対して、主は神殿の崩壊と世の終わりの出来事とを重ね合わせるようにして語ってこられました。この章を 9 回に分けて語らせていただきましたが、最後は「主の再臨に備えてどのように生きているべきであるか」というテーマでもって締め括られます。締め括られると同時に、これは 25 章で学ぶ 3 つの教え（譬＋寓話）の序論としての役割をも果たしている¹。キリスト者は今という時をどのように生きなくてはいらないか。これは私たちの全生活に関わる重要な問いです。

【本論】

今日の箇所はシンプルに二つに分けることができます。

45-47 節：良いしもべの振舞いと報い

48-51 節：悪いしもべの振舞いと報い

¹ 25 章では、以下の三つの教えを学ぶ。

①25:1-13 花婿を待つ 10 人の乙女の譬

②25:14-30 タラントの譬

③25:31-46 羊と山羊の譬（寓話または直喩）

本論 1. 良いしもべの振舞いと報い

主人から、その家のしもべたちを任されて、食事時には彼らに食事をきちんと与えるような忠実な賢いしもべとは、いったいだれでしょう。(24:45)

ある家の主人が、多くいるしもべの中から一人を管理者として立て、旅に出かけたという舞台設定がなされる。ここではまず、敢えてアレゴリカルに解釈してみたいと思います。「主人」とは主イエスを表し、「しもべたち」というのはキリスト教会を構成する主の弟子たち全般、そしてその中から代表的な弟子が選ばれ、群全体の管理をするという設定になるでしょう。主人が旅に出ることは、主イエスが復活後、昇天される様子を表します。そして、いつかは分かりませんが、戻って来る日が「再臨」に位置づけられる訳です。その間、管理を任された人は、一時的な職務として主人の代行をする。主人が本来することを、指示された通りに行なわなくてはなりません。「**食事時に彼らに食事をきちんと与える**」というのは、霊的な食物である御言葉を取り次ぐ奉仕と言えるか。すると、「**食事時**」というのは、毎週行なわれる礼拝を表しているように思えます。もしこの「管理者」が忠実であれば、その奉仕を怠ることなく、主より預かった群を牧することに専心するでしょう。毎週御言葉を懸命に学び、信徒が生きていくための知恵と力を与えられるよう、努力することでしょう。

主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。(24:46)

「良いしもべ」は、いつ何時主人が戻ってきてもいいように、オールタイムで忠実な働きを続けている。これがベストな生き方であることは言うまでもありません。

まことに、あなたがたに告げます。その主人は彼に自分の全財産を任せるようになります。(24:47)

忠実に歩んでいた管理者は、主人が帰ってきたときに喜ぶでしょう。「お帰りなさいませ。あなたが戻られる日を心待ちにしていました。ご覧ください。あなたのしもべたちは皆元気です」。このように言いうる管理者は幸いです。主人は喜び、彼に更に重要な地位を与える。彼に「よくやった。当面は休んでいてよろしい」と言うのではなく、より重要な責任を担わせる。それは一見、当事者にとってはしんどいことのように思えますが、神の国の奉仕は肩の荷が軽く、「最も深い休息に通じる労働」(中澤)となるのです。「全財産を任せる」とは、神がお造りになった全被造物をくまなく見ていくということでしょう。

さて、このようにアレゴリカルに解釈しますと、この譬話は教職者に向けられた教えとして読まれることになる。しかしながら、この譬話には幅広い解釈の可能性が内包されているのです。

本論 2. 広い解釈の可能性

第一に、この譬話はすべての信徒に向けられていると考えられる。「管理者」と言うとき、それは各々の「賜物の管理」という意味で捉えることができ、それを如何に活用し、隣人のために用いるかという責任となるのです。実は、この譬話はルカ福音書にも並行記事があり（ルカ 12:41-48）、話の流れもマタイと共通点をもっています。「泥棒が押し入る時間を知っていたら、おめおめと自分の家に押し入られることはない」というストーリーが、マタイもルカも直前に出てくるのです（マタイ 24:43、ルカ 12:39）。ルカでは、その話を聞いたペテロが「**主よ。このたとえば私たちのために話してくださるのですか。それともみなのためなのですか**」と問う（ルカ 12:41）。更に、マルコは同様の文脈において、主イエスが「**わたしがあなたがたに話していることは、すべての人に言っているのです**」（マルコ 13:37）と言われたことを記録しています。つまり、主イエスは牧師などの教職者だけでなく、すべての信徒に向けて「目を醒ましていなさい」と訴えておられるのです。目を醒ましているとは、自分に与えられた務めに対して忠実であること。それは、必ずしも御言葉を取り次ぐ奉仕だけのことを言っているのではなく、日々主イエスと交わって生きることであり、祈りの責任を果たすことであり、職場でも学校でも家庭でも、自分がやらなくてはならない務めを懸命に果たしていくことなのです。

第二に、この譬話は各個教会に向けられたメッセージとしても捉えることができるでしょう。一つ一つの教会にはそれぞれの特色があり、群としての賜物、その地域に根ざしている意味があります。その地にあって、福音宣教を推進していく使命が与えられており、また共同体としての霊性が整えられていなくてはならず、社会に対する責任があります。よって、この譬話は個々人に留まらず、共同体へのメッセージとしても解釈することができる。ヨハネ黙示録には、7つの教会に対する主イエスの戒めがあります（1:11-2:29）。そして、その教会の霊的状态を主は鋭く見抜き、このようでありなさいとの御言葉を投げかけておられます。この東伏見福音キリスト教会の霊性もまた問われているでしょう。

第三に、（ここからはやや文脈から踏み出しますが）この譬話は各国の為政者に向けられたメッセージと解釈することもできるでしょう。国を治める者も、自分に与えられた職権を乱用してはなりません。国民を愛し、国民の生活を守り、権威を委託された神を畏れ、栄光を神に帰する政治を行なう義務があります。キリスト者が「上に立つ権威に従う」（ローマ 13:1）のは、神が「国の管理者」として彼らをお立てになったからです。彼らもまた、再臨の主の御前に立つ日がくる。それを「知らなかった」では済まされないのです。

第四に、この譬話はすべての人間に向けられたメッセージと捉えることもできるでしょう。こうなってくると、解釈の幅は最大限に広げられることになります。一人一人の人生には意味があり、創造主なる神に対する責任があります。それは、創世記 1:28 に戻っていくならば、地を管理する責任です。神が造られたすべてのものを愛し、傷のあるところに手当てを施し、争いある社会に平和をもたらしていく使命。これは、キリストによって贖われることにより、信仰によって真に果たし得る責任であります。だからこそ全世界の民はまことの神を知らなくてはならないのです。生まれつき大きな障害をもった人であったとしても、それでも神に対する義務がある。それは「生きる」という義務です。自分には何もできないと考え、人生を投げ出してはいけません。三浦綾子さんを信仰に導いた前川正さんが言っているように、「生きる」とは「義しい務め」なのです（『光あるうちに』 p. 19）。

本論 3. 悪いしもべの振舞いと報い

このように目一杯解釈の幅を広げた上で、48 節以下の「悪いしもべの振舞いと報い」を読んでみましょう。

ところが、それが悪いしもべで、『主人はまだまだ帰るまい』と心の中で思い、その仲間を打ちたたき、酒飲みたちと飲んだり食べたりし始めていると、そのしもべの主人は、思いがけない日の思わぬ時間に帰って来ます。そして、彼をきびしく罰して、その報いを偽善者たちと同じにするに違いありません。しもべはそこで泣いて歯ざしりするのです。

(24:48-51)

「悪いしもべ」は、主人が帰って来ないのをいいことに、傍若無人な態度でもって、任された群をいじめる。恐らく、想定される状況としては、主人は「いつ戻ってくる」という日時を明確に告げないで出かけて行った。よって、その日は皆目見当がつかない。いつまで経っても戻って来ないものだから、気が緩んだ「管理者」は、一時的に与えられた職権を乱用し、自らを主人のように振る舞い、しもべ仲間たちに対して横柄な態度を取り始めたのでしょう。「仲間」である以上、本来は立場的な優劣などなく、あくまでも群の管理のために責任を託されたに過ぎません。本来、すべての人間はこのような認識をもって生きるべきです。

教会の教職者は本来信徒の一人であったところから、群を養うために立てられ、そのために主によって必要な賜物を与えていただいた存在です。霊的な賜物とは、自分の力で得たものでは断じてない。また、信徒一人一人も、生きていく様々な社会の中であって、へりくだった生き方をしなくてはなりません。教師は一見、生徒に対して優位性の

ある立場に見えます。しかし、教師も生徒も一人格である以上、教師は生徒に仕えることにおいて神に栄光を帰する。また、生徒は教師に従うことによって、神に仕えるのです。同様のことは、親子関係においても言えます。親は子どもに対して優位性をもつ者ではなく、子どもの人生の責任を一時的に託された存在であり、創り主なる神を畏れる心を教え、愛し、訓戒し、育てていくべき者であるはずです。子どももまた、親を敬うことによって、神に栄光を帰することができます。夫婦の関係においても、夫はキリストが教会を愛されたように妻を愛し、妻は応答的な愛をもって夫に仕える。このようにして、各々の立場に応じて神に対する責任を果たしていくのです。これがエペソ5:22-6:9、コロサイ3:18-24等で使徒が教えていることでしょう。私たちが生きていく社会にあってどう歩んだかが、主の再臨の日に問われるのです。

そして、このことは国を治める為政者、一人一人の人間の生き方にも適用されてくる。神によって与えられた職権をどのように用いて生きたか。どういう国づくりをし、どういう家庭を形成し、市民・国民としてこの世に仕えたかが終わりの日に一人一人に問われることになるでしょう。

最後に、もう一度適用の幅を狭め、キリスト者へのメッセージとして主の御言葉を受け留めたいと思います。51節では、不忠実な人生を歩んだ者は罰せられると言われています。「きびしく罰する」とは、文字通りには「二つに裂く」ことを意味し、その審きの厳しさをよく伝えています。恐らく、これは「共同体からの追放」を意味するでしょう。それまで与えられていた職権は取り上げられ、交わりから締め出されるということです。「偽善者たちと同じ」にされるとは、マタイ23章の文脈で「偽善者」が常にパリサイ人や律法学者を指す言葉として用いられていたことから、形ばかり神に仕えることの危険性を教えているでしょう。私たちの奉仕は常に全身全霊のものであるべきで、人の内面を知られる神の御前に申し開きをしなくてはならない日が来ることをよくよく心に留めて、自己吟味をしながらこの信仰の旅路を歩み続けたいと思います。

【結論】

私は父親にこんな質問をしたことがあります。「これから世界では何が起こるか分からない。戦争が勃発するかも知れない。世の終わりが本当に近いかも知れない」と。すると、父はこう答えました。「自分のやるべき務めを忠実に果たし続けなさい。学生であるならば、その本文である学業に集中しなさい」と。腰を据えて、一切の営みを神への奉仕としてささげる生き方を地道に続けていきたいと思います。

【祈り】

すべての人間を管理者として創造してくださった天の父なる神様。私たちもまた、あなたのものを任された存在です。この人生も、関わりのある社会も、それぞれの立場にあって「仕える」という責任が与えられています。とりわけ、主イエスを信じる者には、その与えられた霊的賜物をどのように用いたかが問われることになるでしょう。贖われた管理者として、この世界に仕える者とならせてください。支配ではなく、愛と思いやりとをもって、私たちにできる一つ一つのことに丁寧に取り組んでいくことができますように。

【祝宣】

仰ぎ願わくは、

人類にいのちの息吹を吹き込み、「地の管理者」としての責任を託し給うた、父なる神の愛。

各々の弟子に霊的賜物を与え、主への奉仕のために存分に用いさせ給う、主イエス・キリストの恵み。

主の再臨に備え、今日という日を懸命に生きさせ給う、聖霊の親しき交わりが、我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。